

# 飯野陣屋跡出土遺物の新知見(1)

鳴田 浩 司

## 1. はじめに

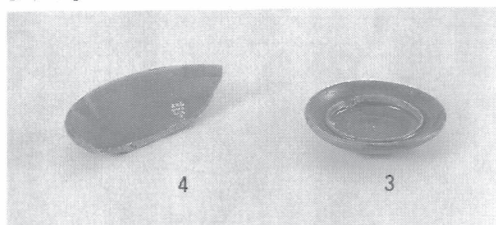
昭和61年度に筆者は中近世城跡研究調査として飯野陣屋跡の確認調査を担当しました。ところが城館については全く知識がなく、降って湧いたような話に、非常に戸惑ってしまいましたが、また一方で未知の分野ができるのも何かの縁かと肯定的に考え、11月の調査に臨みました。しかし所詮どう見ても納得のいく調査ができず、報告書にいたっては全くまとまりのないものとなってしまいました。また飯野陣屋の調査自体も陣屋内の三条塚の周溝確認にどちらかと言えば主眼があったようで、この点からも中途半端な調査になってしまったのかも知れません。そしてなお現在にいたってこのわだかまりが消えずにいたところ、今回当時の出土遺物について、新たな知見を得ることができましたのでここに紹介し、報告書の内容を加筆・訂正し、併せて最後に近世常滑焼き大甕の資料紹介をしたいと思います。

## 2. 遺跡と調査の概要

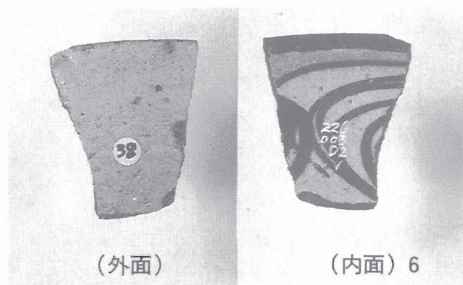
これについては報告書を読んでいただければ解ると思いますが、ここでもう一度簡単に説明します。飯野陣屋は初代藩主保科正貞が慶安元年(1648)に築造したとする富津飯野藩の藩邸です。保科家は初代正貞以来、明治維新に至るまで10代、220年あまり続いた石高2万石の小藩ですが、正貞の母は徳川家康の異父同母妹であったため、名門と言われました。鶴ヶ城と白虎隊で有名な会津藩とは本家(会津)・分家(飯野)の関係になります。現在県指定史跡となっている周濠に囲まれた部分は内邸と呼ばれ、その面積は4万坪になります。これがまた、本丸、二の丸、三の丸とに区画されていました。三の丸には三条塚古墳があります。調査地点は各地区に4か所設定しましたが、内2か所は三条塚古墳の周溝確認のためのものでした。残りのうち1か所は藩邸の推定地に設定しました。

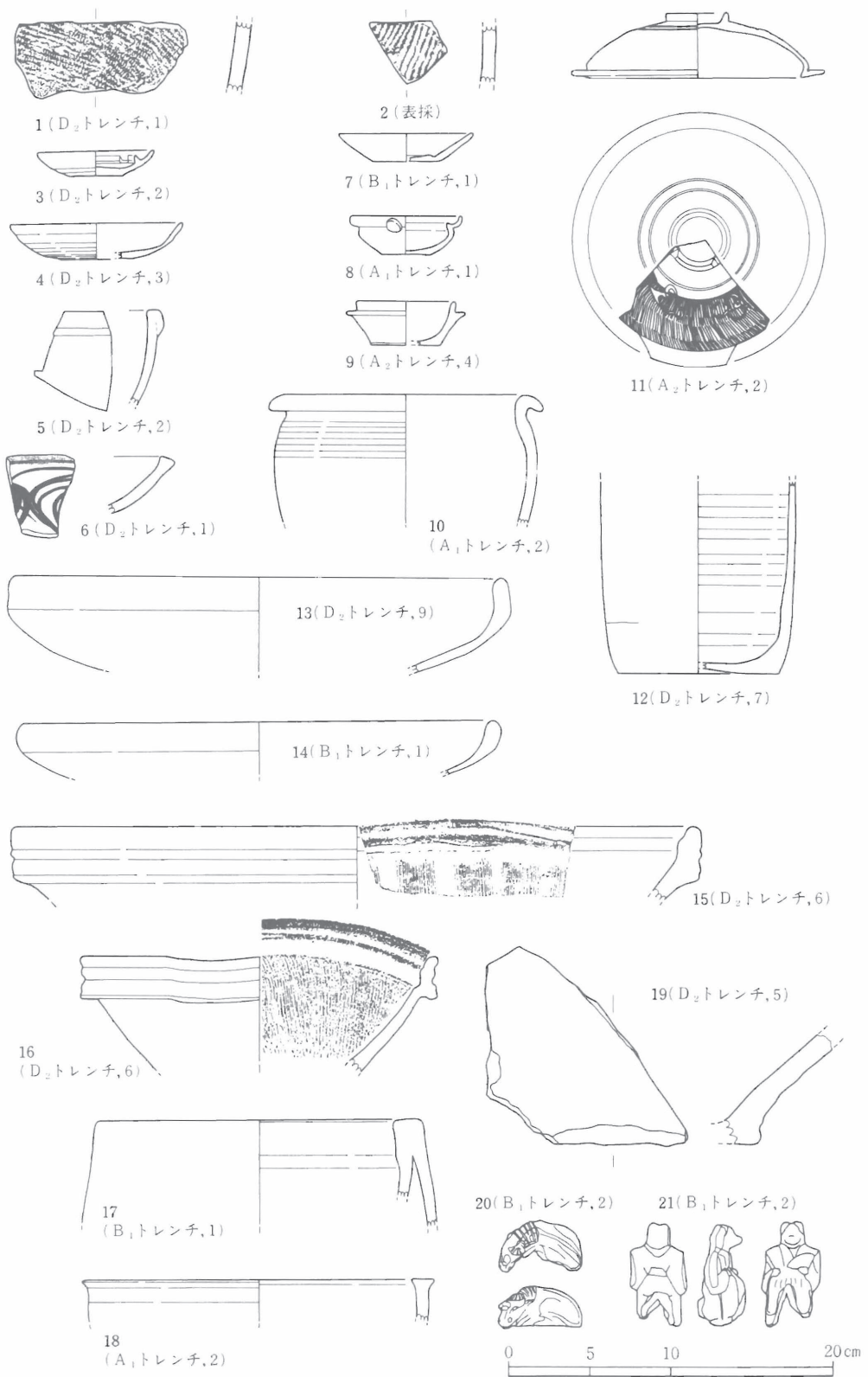
## 3. 出土遺物(遺物番号は報告書どおり)

3, 4は瀬戸・美濃産の鉄釉の灯明皿で、釉を流し掛けた後、一部ふき取っています。3の底部には重ね焼きの痕跡が残っています。これらは灯明皿ですが、内面に受け部を持つもの(受皿)と持たないもの(油皿)とがあり、実測図とは逆に4(油皿)を3(受皿)の上に重ねて、セットとして使用していたようです。これは江戸時代の絵の中にそういった様子が描かれていることから類推できます。ところで近世以降の陶器・磁器についてこのように瀬戸・美濃産と呼ぶのは、瀬戸と美濃は山地こそ間を隔てているが、両者の使用する陶土にほとんど違いがなく、陶工達の往来は頻繁で、制作技術に全く違いがないため区別がつかない現状にあるためこのように併記して呼ばざるをえないのです。灯明皿の出現は18世紀の半ば以降で、当遺物の時期については19世紀の後半でしょうか。



6は「馬の目皿」と呼ばれるもので、3, 4同様瀬戸・美濃産です。鉄絵により円弧状の模様を内面に描き、その上に透明釉を懸けています。また口縁部にも鉄絵を施しています。小破片で復元径ははっきりとわかりませんが27cm前後になると思います。時期は19世紀の前半ぐらいでしょうか。

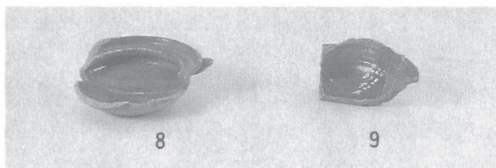




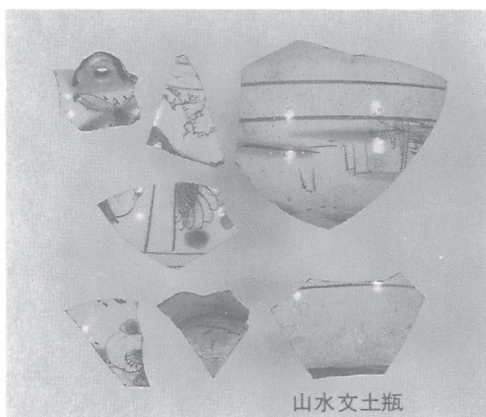
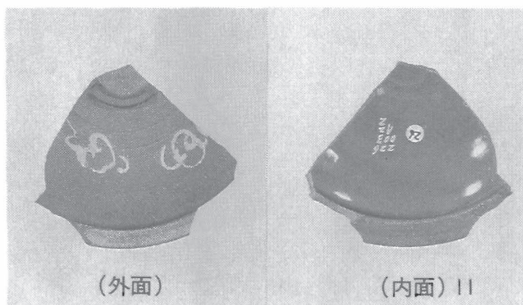
第1図 飯野陣屋跡出土遺物実測図(縄文式土器, 須恵器, 陶器, 土人形等) S = ¼  
 (千葉県中近世城跡研究調査報告書第8集より転載)

高台を持ちます。

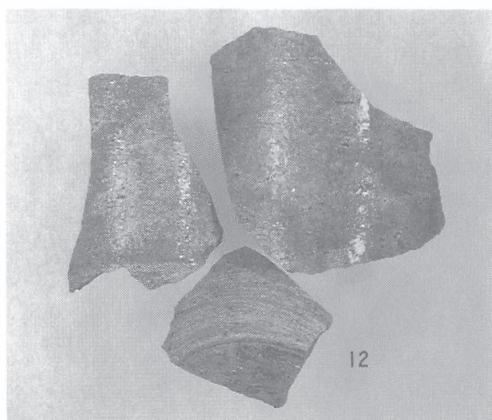
8, 9はミニチュアの土器です。胎土は茶褐色で砂粒は含まず軟質で低火度焼成で、茶色の釉薬を懸けています。何を模したのか良くわかりませんが8は鍋で、9は釜でしょうか。これとよく似た資料が千代田区平河町遺跡で出土しています。20, 21もそれぞれ牛と狐を型取った土人形で、当時の玩具といったところでしょうか。素焼きの型押し成型です。京葉線八丁堀遺跡では多量の土人形が出土しています。この土人形が出土した地点は幕末時に町屋か寺域の一部となっていたようで、庶民の日常の遊びの一端を垣間見る思いがします。飯野陣屋は一応武家屋敷に当たるので、当時は身分の差なく同じような遊びがはやっていたでしょう。この遺物については単独では時期を決定できません。



11は行平鍋の蓋です。高台型のツマミの外側に2本の同心円沈線を入れ、更にその外側から受け部の間に細かな刻みを入れ、その上に「白土」を懸けています。外面は無釉ですが内面には灰緑色の釉掛けをしています。器表面は灰色で非常に堅く焼き上がっています。この製品は多分益子焼きで、時期的には19世紀以降の新しい段階でしょうか。もう一点写真で紹介した資料の中に相馬大堀系のがあります。これは山水文土瓶と呼ばれるもので、同様の意匠のものが益子焼きや信楽焼きにも見られます。時期は19世紀の新しい段階でしょう。

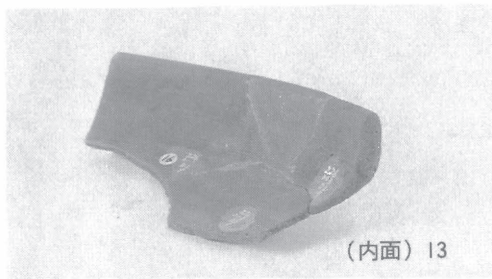


12は瀬戸・美濃産の灰釉徳利の底部片です。外面には高台近くを除いて灰釉が懸けられています。体部には荒い篋削り痕がかなり明瞭に残っていて、露体部は鉄分により茶褐色に発色しています。胎土は砂粒を多く含みザックリした感じですが高台を作り出しています。

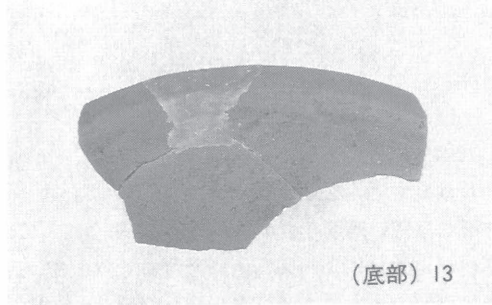


13, 14は素焼き焙烙で江戸遺跡研究会第一大会発表要旨によれば18世紀の末か19世紀にはいるものの様に見えます。その最も顕著な特徴が、器高が非常に低く底部と体部の境がはっきりしないということにあります。古手のものは器高が高く、体部の立ち上がりが明瞭で、内耳が付けられています。ちなみに用途は、火に架けて豆や胡麻をいったり蒸し焼きにしたりするものです。焙烙には、ここで紹介した素焼きの他に瓦質のものがあります。また今回は出土していませんが、これとセットをなす同質の蓋が存在するようです。

15, 16の播鉢は報告書の中では備前が信楽系統と書きましたが、実はこれを書くにあたって躊躇しました。それはまず、私が考えた時期の備前・信楽の資料がほとんどないこと、胎土や成形に備

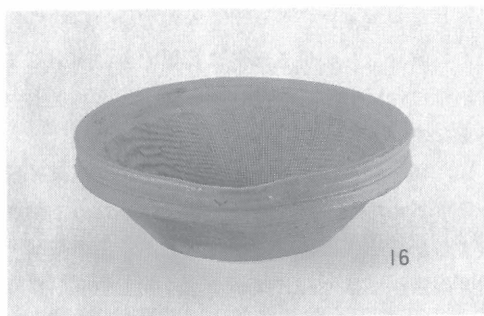


(内面) 13



(底部) 13

前・信楽の荒々しさが見えないことによるものでした。しかし極く最近になって、堺(大阪)・明石(兵庫)産の播鉢が大きくクローズアップされてきたことを知りました。堺播鉢は少なくとも寛保元年(1741)以前から生産されているようで、江戸では18世紀前半にはそれまでの備前や丹波に替って主流となったということです。堺では堺環濠都市の調査にあたって、この播鉢が多量に発見されるようになりました。そして瓦と併焼していることも解りました。堺播鉢の最大の特徴は焼成の際に焼き台を使用すること(即ちその痕跡が残っている)と、底部のおろし目がいわゆるウールマークの形態をしていることです。残念ながら15、16ともに底部を欠損しているため断定はできません。出土遺物の時期ですが、堺市の白神さんに報告書の実測図と写真を見ていただいたところ、15は堺の系統で、III型式(19世紀)にあたり、16は備前の可能性もあるが、やや古くI型式(18世紀中頃)か、それ以前にあたるのではないかというご教示をいただきました。

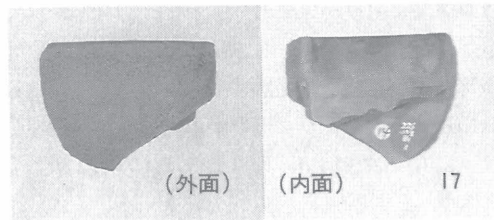


16



15

17は素焼きの土器で、器高の違う二つの器体を口縁部で接合したのですが、まだ全く同じものは見ていませんが、多分火鉢か火消しの壺の様に中に火を入れるものの一種と思われます。



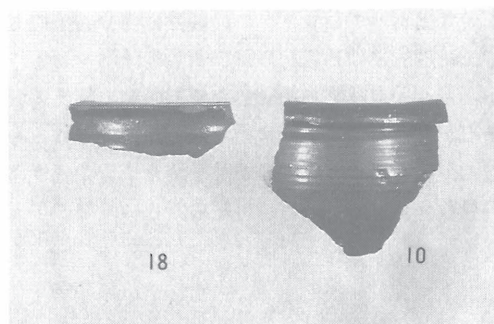
(外面)

(内面)

17

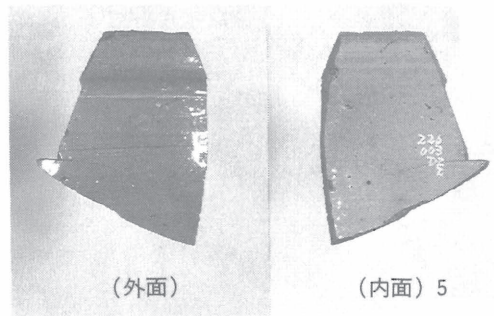
18は植木鉢です。口縁部は平坦で、内外面に鋭角的につまみ出されています。内外面ともに鉄釉が施されています。これも多分瀬戸・美濃産と思われます。植木鉢は18世紀の末当りから生産されるようですが、当遺物は19世紀代のもののようです。

10は鉄釉の鉢で、復元すると高台が付ます。18同様瀬戸・美濃産と思います。時期も18と同じと思います。



18

10



(外面)

(内面) 5

5は透明釉の鉢です。口縁の形状から、練り鉢と考えられます。内外面とも透明釉が懸けられています。口縁部の折り曲げが完全に密着しているので、時期的には新しく、19世紀後半になるでしょうか。底部は幅広の削り出し高台となります。やはり瀬戸・美濃産でしょうか。

今回は磁器については一切触れませんでした。が、時期的には報告書のとおりと考えてよいものと思います。近世の陶磁器や在地産の土器の研究はまだ始まったばかりです。また資料が増えたところで紹介していきます。

#### 4. まとめ

出土遺物からすると18世紀後半以降のものがほとんどを占めます。陣屋が1648年に築造されたのであれば当然その時期の遺物も発見されてよいはずですが、この傾向は今回の調査のみならず、他の周辺の調査でも同じ傾向にあります。私の調査した地点では時期を分層することは全く不可能でしたし、遺構もわかりづらいものでした。トレンチ調査では現地表面からわずかの深さで貝殻地業跡が発見されたことから、当時の生活面と現在の生活面にはほとんど差がないことが解りました。これがまた遺構の検出を困難にしている原因となっています。

ここで江戸遺跡研究会の資料から江戸遺跡における出土土器の傾向について簡単に説明します。17世紀前半には天目碗、志野皿、志野鉄絵皿が多く肥前系磁器は非常に少ない。17世紀後半は陶器では瀬戸・美濃産に加え肥前系の刷毛目や灰釉の碗、京焼き風の皿、鉢などが目立ち始めます。18世紀前半は天目碗はほとんど見られず陶器類は減少する。逆に磁器製品が増え、コンニャク印版の碗や見込を釉剥ぎした皿などが出土する。18世紀後半は碗、皿類は肥前系の磁器製品が、袋物、仏具、鉢、甕類は瀬戸・美濃製品が占めるようになる。磁器では厚手のクラワンカ系の碗、皿が主体で、陶器では播鉢、片口鉢、德利、仏具などが見られる。19世紀前半は磁器は陶器製品に比べ著しく出土量が増加し、碗、皿以外の器種も豊富になる。陶器は前期の器種以外に大型の皿類、灯明具、土瓶などが出土し、地方窯の製品も見られるようになる。19世紀後半は肥前系磁器が減少し碗、皿類は瀬戸・美濃産が独占する。陶器では益子、笠

間、飯能などの地方窯の製品が増える。

一般的に以上のような状況が見られるということです。

一方、生産地における調査・研究も年々進んできており、愛知県瀬戸市の藤澤良祐氏が瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要で、窯跡資料の集成と編年を行っています。愛知県陶磁資料館の仲野泰裕氏は、生産地のメリットを活かして、消費地における陶磁器の全体的な資料収集を行っています。また磁器については佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏が、窯跡資料の編年と、全国の肥前陶磁器の集成を行っています。多大の成果をあげています。ただし、消費地においては時期のかなり異なるものが同一文化層から出土することが普通なので、その文化層の時期の決定は慎重に行われなければなりませんし、比較的文献資料が多い時期でありますので、こう言ったものや絵図などを活用する必要があると思います。

富津飯野藩も東京湾を隔てて江戸と至近距離にあり、屋敷跡という性格を考慮しても、江戸遺跡と同様な傾向にあると考えてよいと思われれます。今後は江戸遺跡に見られる17世紀前半から18世紀前半のまとまった遺物の検出が待たれる一方で、逆にこの時期はほとんど生活の痕跡がないと考えなければならないかも知れません。ただし、このことは従来言われてきた飯野陣屋の築造時期を積極的に否定するものではありません。近世考古学のフィールドとしての飯野陣屋の占める位置は非常に高いものです。今後は文献・絵画資料研究と平行して、より詳細な調査が望まれるところです。

センターで調査した、あるいは遺物の紹介のあった近世遺跡はまだ極くわずかに過ぎません。この研究連絡誌の発刊と相前後して佐原市小野川関連の遺跡や八日市場市借当川関連の遺跡の遺物紹介があると思いますが、これからの資料の増加に期待したいと思います。

#### 参考文献

- 千葉県富津市飯野陣屋稲荷口遺跡調査報告 昭和57年 稲荷口遺跡調査会
- 飯野陣屋濠跡発掘調査報告書 昭和60年 富津市教育委員会
- 千葉県中近世城跡研究調査報告書 第8集 飯野陣屋跡・山崎城発掘調査報告 昭和62年度

- 財団法人千葉県文化財センター  
江戸のやきもの図録 1984 五島美術館  
瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VI 1987 瀬戸市  
歴史民俗資料館  
瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VII 1988 瀬戸市  
歴史民俗資料館  
瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要VIII 1989 瀬戸市  
歴史民俗資料館  
江戸遺跡研究会第1回大会 「江戸の食文化」 発  
表要旨 1988  
江戸遺跡研究会第3回大会 「江戸の陶磁器」 発  
表要旨, 資料編 1990  
江戸遺跡情報連絡会会報  
京葉線八丁堀遺跡 1990 京葉線八丁堀遺跡調査  
会  
平河町遺跡 1986 千代田区教育委員会  
国内出土の肥前陶磁 佐賀県立九州陶磁文化館  
1984  
愛知県陶磁資料館研究紀要1 1982 愛知県陶磁  
資料館  
愛知県陶磁資料館研究紀要4 1985 愛知県陶磁  
資料館  
愛知県陶磁資料館研究紀要5 1986 愛知県陶磁  
資料館

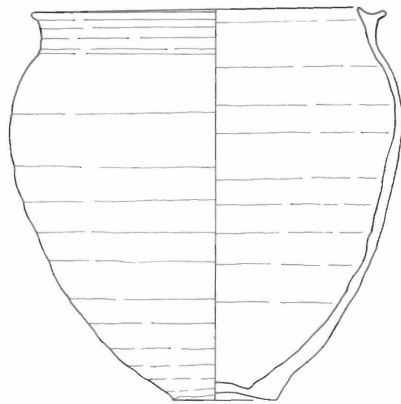
## 5. 資料紹介

ここで紹介するのは、昨年度筆者が調査した成田下総線新山遺跡（下総町）で畑作業用の水甕として使用されていた常滑産の大甕です。調査地のほぼ中央に地中に底から三分の二程度埋められていて、その中には水が八分目ほど溜められていた、まだ現役の甕です。地主さんの好意で成田事務所に引き取らせていただきました。常滑産の甕は今でもその辺の畑に転がっているのを見かけることがあります。それらはほとんどが上半部が円筒形で土管のような口をしており、全体に弾丸のような形で、薄い黒褐色から赤褐色をしてやや焼成

に甘さを感じます。これらは常滑焼きで言うところのいわゆる“赤もの”ですが、ここで紹介する甕はそれらとは明らかに異なる“真焼け”の系統に属するものです。甕は完形品で大きさは、口径56.5cm, 底径16.9cm, 高さ63.2cm, 胴部最大径63.0cmを計ります。口縁部は若干歪みが認められますが、断面はT字からY字で、外面の突出に比べ内側の突出部が下がることはありません。肩部には一か所縦方向の擦痕が見られますが焼成前についたものようです。口縁から肩にかけて胡麻ふり状の茶褐色の釉が付着し、それ以外は黒褐色の極く薄い釉が付着しています。内外面とも粘土紐輪積み痕が明瞭に残っています。焼成は極めて良好ですが、底部近くが折れて歪んでいて、その近くには釉着痕が残っています。時期は大きく見て18世紀代のものと考えられます。

## 参考文献

- 常滑市民俗資料館研究紀要II 1986 常滑市教育委員会



第2図 (S=1/6)

(現職 財団法人香取郡市文化財センター主任調査研究専門員)